

木村兼葭堂筆「兼葭堂雅集図」の史的意義  
—18世紀後半の日韓における日本文人の表象—

朴 晟希 東京大学

韓国・国立中央博物館蔵「兼葭堂雅集詩文」は1764年、朝鮮通信使の正使書記・成大中(1732-1812)が木村兼葭堂(1736-1802)に所望して制作された。大典(1719-1801)の題字と後序、兼葭堂の絵(「兼葭堂雅集図」)、朝鮮通信使と交遊した日本文士たちの賛詩で構成されている。本研究では、「兼葭堂雅集図」の史的意義を美術史学の立場から明確に提示するため、第一に、兼葭堂の画業における初期の紀年作としての位置について、第二に、18世紀後半の朝鮮知識人の対日認識に与えた影響について考察する。

第一に、「兼葭堂雅集図」は、32.5×44.5センチメートルの小さな絵であるが、10代の頃から「唐画」を志し、修業を続けた兼葭堂の文人志向が明白に表われる好例である。春の日、浪華の葦辺に建った書齋・兼葭堂で、兼葭堂会の詩会が開かれる情景を描いた画面の中には、「市隠」のシンボルとして理想化された兼葭堂を背景に「蔵書」、「煎茶」、「詩作」、「書画」など中国由来の文人を表象する景物が鮮やかな彩色で配されている。本作は、晩明期の江南文人社会において盛んに制作され、同時代の韓国でも受容されていた明末呉派の雅集図の伝統を踏まえたものである。絵画表現においては、兼葭堂が画学の学習期に師事した諸要素(画譜類、長崎派の着色画、明清画、池大雅風など)が混在している。

第二に、「兼葭堂雅集図」は成大中が持ち帰って以来、漢城(現・ソウル)の知識人ネットワークを通じて広く閲覧され、多大な反響を呼び起こした。「蔵書家」であり「画家」である兼葭堂のイメージは、特に李徳懋(1741-1793)、洪大容(1731-1783)のような北学派の記録の中に、日本の文芸を代表する存在として表われる。当代および、後代の朝鮮知識人による日本研究、日本絵画認識にまで影響を与えた。なお、成大中の息子・成海応(1760-1839)は、この絵に黄公望の雅趣があると賞賛しており、朝鮮王朝後期における日本絵画の評価が近世東アジア文人の共通の教養である中国絵画を基準にしていたことを裏付ける。

朝鮮文士の依頼で成立し(大典『萍遇録』)、日本文人の雅な集まりの様子を視覚化した「兼葭堂雅集図」は、当時29歳の兼葭堂にとって、文人趣味の絵画化に対して出した一つの答えであり、初期の画業の集大成であったといえる。また、18世紀後半は朝鮮知識人社会にとって、彼らが外交使節として同時代の東アジアの文士たちとより緊密に親交を結び、さらに強い同質感を示し始めた、対外認識の変換期に当たる。本作は、18世紀後半から19世紀前半における韓国の海外交流の新傾向である「海外墨縁」の契機ともなった作品として重要な意味を持つ。以上の二点に着目し、積極的に評価したい。

(ぱく・そんひ)